
仮面舞踏会の瞳

西崎想

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面舞踏会の瞳

【Nコード】

N5233Z

【作者名】

西崎想

【あらすじ】

目の見えない少年、俊。

ミミは、その俊を守ろうと、他の星からやってきた。俊はいじめなどから、少しずつ成長していく。

ミミと俊は、スイーターマンの魔の手によって、共に戦いの世界に身を投じていく。

星の言葉（前書き）

俊を、守ってください、
ミミ
私はそう思っています。

星の言葉

星が言う。

人は感情の生き物

と、

また、

星は言う

生きなさいと、

力強く。

ミミは少年を見て、こう思う、

かわいそう……目が見えないなんて……、

少年の名前は、

俊^{とし}。

「俊、学校には……行かないの……?」

俊は無言……、

ミミは思う、

俊……外で、みんなと遊ぶ……事も出来ないなんて……

「俊、いい香りでしょう?」

ミミは、俊に、香水を嗅がせた。

うなずく、俊。

「これ、お母さん香り」

俊は言う。

「そう、よくわかるわね、俊」

ミミは嬉しい。

俊は、何かを持っている。

それを、狙うやつらがいる……

それらから、

私が、守る。

仮面舞踏会

俊は目が見えない代わりに、他の機能は人より発達していた。

ミミは彼に、何かを掴んでほしかった。

ミミは、違う星から来た。

そして、ミミと一緒に、悪いスイーターマンというやつらも、やってきてしまった。

そして、それらは、ミミにコンタクトを取って来た。

ミミは、スイーターマンの事は「関係ない」とタカをくくっていた。

しかし……

「俊？」

今までいてた、俊が何処かに行ってしまった。

ミミは心配になった。

外は危ない。

ミミが俊の家の外に出た。

その時だった。

空間が歪む。

こんな経験は、今までなかった。

困惑するミミ。

目を開けると、

そこは、パーティー会場。

仮面をつけて、ドレスアップした人たちが踊っている。

人？

いや、

スイーターマンたちだ。

「俊！」

ミミは俊を探した。

すると、スイーターマンは、ミミに剣で、突き刺そうとした。

キーン………！

ミミは、自分の武器、「魔法の杖」を出して、応戦。

「俊！いるの？どこなの！？」

ミミは叫ぶ。

俊は、ミミに駆け寄った。

「ミミ！」

「俊！大丈夫だった？」

「うん……でも、ここ、どこなの？」

俊は目が見えない代わりに、空気の流れを読むことができた。

「なに？この……すえた臭い」

「すえた？」

「うん、こんな匂い初めて嗅いだよ」

スイーターマンが、ミミから俊を奪おうとする。

ミミは、杖で、スイーターマンを刺した。

「キフアア……！」

そう叫んだ、スイーターマンは、破裂した。

「俊！こっちよ！」

俊の手を掴んで、ミミは走った。

そして、

「星よ、輝きたまえ！」

杖から、何かの気流が生じる。

「アクア・サイクロン！」

幻の水が、スイーターマンを流していく。

空間が歪んだ。

「俊！」

そこは、俊の部屋。

俊の手を掴んでいたミミは、安堵のため息を吐いた。

「もう、大丈夫よ。俊」

「うん、ミミ」

俊の事

ミミは、長い髪、赤い髪。背は155?くらい。

ミミは、未来風の服を着ている。

俊は、14歳、登校拒否の傾向がある。

ミミが聞く、

「俊、学校に行かないの？」

俊は、黙ってうなづく。

「友達……心配してるよ？」

すると、俊は、

「友達なんて、いないよ」

「俊……友達、君の事、見ているよ？」

「僕は、暗闇だから、分かんない」

「それでも、君の事、見ててくれるんだよ」

「僕は、学校にいるとき、いじめられた、もう、いいんだ」

ミミは、どう言えばいいのか、迷う。

いじめ。

それは、優しい俊に当然の様に付きまとう、試練だ。
俊は、優しいあまり、他の子より引いてしまう、

それが、泣き虫の俊を”いじめ”と言う、他人からの、構いを生む。

そうして、俊は、不登校になっていく。

「ミミも行くから、一緒に行くから、……いこう？」

俊は、嫌な顔をした。

そうだとはい、ミミもわかっていた。

俊は、”引きこもり”なのだ。

俊は、一人で、音楽を聴きだした。

「音楽……好き？」

俊はうなずく。

その時、

空間が歪んだ。

「あっ！」

ミミは驚きの声を上げた。

スイーターマンがドレス姿で、踊る。

舞踏会だ。

手には、剣を。

「俊！」

どこかに行ってしまった、俊を慌てて探すミミ。

スイーターマンが、ミミに切りかかった。

するっ……

ミミは、素早い動きで、攻撃をかわす。

「俊ー！」

「ミミー！」

俊がスイーターマンに抱えあげられている。

「俊！」

ミミが叫ぶ。

「俊を、放して！」
そう言っつて、ミミは魔法の杖を出す。

キーン………！

スイーターマンの攻撃を杖で受ける。

「星の輝きよ！」

ミミの攻撃は、水、火、を使える。

今度は、火。

「ファイアー・ボール！」

ミミの攻撃は、目で見ないと、通用しない。
俊、には、通用しないのだ。

幻の、火が、スイーターマンを襲つ。

空間が歪んだ。

「俊、大丈夫だった？」

俊は黙って頷いた。

ミミは、ほっとして、俊を抱きしめた。

心開いて

ミミは俊を気遣う。

ミミの星に、俊みたいな子供が連れ去られて来るから。

なぜか、俊みたいな子を、スイーターマンの組織、ドレイカ帝国は、集めている。

阻止しなければ……俊を守らなくては。

そうミミは思っているのだ。

「俊、みかん食べる？ミミがむいてあげるから」
俊はうなづく。

俊は、少しずつだが、ミミに心を開いてきているようだった。

ミミの事を気遣うこともある。

「ミミ、半分」して

「俊、ミミにくれるの？」

俊はうなづく。

俊が、外へ出ると言い出した。

ミミは喜ぶ。

「私につかまっていれば大丈夫」

そう、ミミは言った。

外へ、

外は、車が通る。自転車もだ。

俊はゆっくりとだが、前に進む。

「僕、この道、前に歩いてたから
俊が言う。」

家の周りを、一周して、

帰ること……、

と、そこで、

空間が、歪んだ。

マスカレイド。

「ここは、そういう場所だ。」

また、俊がいない

「俊ー！」

また、連れ去られてしまうのか……？

ミミは慌てた。

「ミミミー！」

俊がミミの所に駆け寄った。

「俊！よかった……」

ミミは俊を抱きしめた。

少し赤くなる俊。

「帰ろう、俊、ミミと一緒に」
うなずく俊。

ミミは、魔法の杖を使った。

空間が歪む。

さっきいた、道に戻る二人。

「帰ろう、俊」

俊は、ミミに抱き着いた。

「と、俊……？」

「帰ろう、ミミ」

そう、俊は言った。

学校にいこう

「俊、学校にいこ？」

ミミは、俊を学校に連れて行った。

俊も、元気の出てきたころあいに、

ざわざわ、

小学校はにぎやかだ。

俊はミミの腕にかきついていた。

担任の先生に会った。

静かな、女の先生だ。

俊の事は、よく知らない。

それはそうだ。

俊は学校に行っていなかった。

無理もないことだ。

しかし、早く俊の事を知ってもらいたい。

ミミはそう思っていた。

教室にも行った。

ガキ大将みたいな子がいて、俊を構ってくれた。
”いじめ”ではない。

もっと、「俊の事を知りたい」そんな風だった。
優しい、親切な子だった。

学校の帰り道、
ミミミが聞いた。

「俊、今日は良かった？」

「うん！」

俊は、元気よく、ミミミに言った。

ミミミは嬉しかった。

今日は空間は歪まなかった。

夕飯を、一緒に食べた。

俊の、お母さん、お父さん。
そして、妹。

彼らと、ミミミは大分慣れていった。

ミミは、居候。

それを、両親は、許してくれている。

ミミは、こないだいい家族で、俊は幸せだと思っていた。

一人のマスカレイド

俊は、中学校に行き出した。

次第に、俊の口数も増えた。

ミミも学校までは付き添う。

しかし、もうそこまで。

学校に見送った後は、ミミは帰った。

俊が、そうしてくれと、

言った。

ミミは嬉しかった。

これで、スイーターマンのマスカレイドがなければ……。

ミミは、もう、普通の洋服を着ている。

俊のお母さんが買ってくれたのだ。

ミミはありがたく思う。そして、今日も洋服を着ている。

かわいい服。

ミミに似合うと、買ってくれたのだ。
ミミも、家事を手伝っている。
感謝の気持ちだ。

そして、学校が終わった。

迎えに行こうと、思ったとき、

空間が、歪んだ。

目の前が、眩むような、変な感覚。

俊は……？

一緒にいなかったの、舞踏会にはいないのか？

「俊？」

仮面をかぶった、スイーターマンが、ミミに切りかかった。

それを、魔法の杖で、迎え撃つ。

カキーン……。

シャリッ……。

何回か重ねあった。

ミミは、

「星よ、輝きたまえ！」

そういうと、

「アクア、サイクロン！」

そう叫んだ。

破裂していく、スイーターマン。

そして、世界から、解き放たれた。

「……」

「……俊？」

俊は、目の見えない代わりに、匂いでわかる。

俊は、倒れていた、ミミを必死で、呼びかけていた。

「俊、ごめんね。ミミ、大丈夫だから」

俊は泣いていた。

ミミは、俊を抱きしめた。

いじめ

俊が、怪我をして帰ってきた。

ミミは驚いて聞く。

「どうしたの？」

すると、俊は泣き出した。

……こういうことだ。

俊が、クラスの子に突き飛ばされたのだ。
明らかに、「悪意」があったか、
クラスの子らは、「あった」「子と、「なかった」「子の二手に分
れた。

しかし、悪意はないようで、あったのだ。
明らかかな、悪意ではないのか。

その子は、名前を、まもる守君と言う。

その子は、俊を、じっと見ていたという。
なにを、そんなに見ていたのか……？

それは、分からない。

しかし、俊は言った。

「電流の流れるものを、腕に当てられていた」と、
悪意は、あった。

だが、学校では、俊は言わないので、真相は謎に包まれた。

「ミミと、守君に言いに行こうか？」

そういつが、俊は、絶対にやめたと、強く拒否した。

ミミは、俊を心配する。

が、俊は、次第に友達を作っていた。

「俊、よかったね」

ミミは、心から嬉しそうだ。

次元が歪む事は、最近ない。

スイーターマンの事は、謎に包まれたままだ。

しかし、俊に、何をしようとも、

ミミは、俊を守る。

そう思っていた。

守君

守君を見に、ミミが学校に行った。

担任の先生によると、

守君は、あんまり他の子ともうまくやっていないらしい。
「あんまり、彼を責めないでほしい」と、先生は言った。

ミミも、そうしたいと思っていた。

教室に行くと、守君が、俊をいじめていた。

あの、電流を流すという機械を俊に当てている。

「俊！」

ミミは慌てて駆け寄る。

「わーい、女に守られてやんのー」

そう言つと、守君はあっかんべーをした。

「ぼ、僕は、守られてなんかっ……………」

俊は泣き出した。

「ごらっ！守！俊に謝れ！」

ガキ大将の、一括で、なんとか、この場は収まった。

が、

俊は、その後、守君の事を、気にしだす。

守君との別れも、知らず。

開眼

学校へ、

ミミもついて行った。

俊は、「離れて」と言ったので、ミミは遠目で。

「じゃあ、私、帰るわね」

そう言って、ミミは学校を後にしようとした、

その時、

!?

すべてが暗黒に包まれた。

ミミは立ちすくむ。

しかし、俊の事を思った。

「俊!」

「ミミ!」

俊が、ミミの所に駆け寄った。

俊も、この世界にいるようだ。

「はやくここから、出よう」

俊が言う。

「ええ」

と、ミミ。

そこに、仮面をかぶった、人が寄ってきた……。

背は低い。

ミミがそれに、魔法の杖をかざした。

スイーターマンの仮面が割れた。

「!?!」

それは、

「守君!」

ミミが駆け寄る。

倒れた守君を、俊が抱きかかえた。

「守君! どうして……?」

俊が言う。

「僕、人に……仮面をかぶせられて……」

じぶっ……

血を吐く守君

「いじめて……ごめんな、俊……く」

守君の幼い手が、力を失った。

「守君！」

もう、動かない、その、うつろな目。

俊は、守君の、顔が見たい。

そう思った。

悔しがる、俊。

「くっそー！」

光が……

俊に、光が、そそぐ。

俊は目を開けた。

「俊！」

「ミミ……君の顔が」

やっと……見えた、

ミミの星

「俊！見えるの？見えるのね？」
ミミが俊の肩を持つ。

「うん！ミミ、君って可愛いな」
ミミは、その言葉に照れる。

「守君は！？」
俊が、そう言っ、守君を見た。
守君はもう、すでに息絶えていた。

「……くそう」
俊が、齒を食いしはる。そして、立ち上がった。
「スイーターマンめ！僕が相手だ！かかってこい！」
そう、叫んだ俊を、ミミはドキドキして見つめた。
「と、俊……」

辺りは、眩しくなり、舞踏会が始まった。

俊は、スイーターマンに、怒りの鉄槌をかました。

どんっ！

スイーターマンは、煙を出して、消滅した。

「こい！僕が全員倒してやる！」
俊はそう吠えた。

ミミは魔法の杖で、スイーターマンを突く。

シャーーン！

綺麗な音を出して、スイーターマンは消滅した。

「俊！貴方は目をつむって！」

その声に、俊は目をつむった。

「アクア・サイクロン！」

幻影の水が波を立てる。

スイーターマンは消えていく。

空間が歪む。

「ここは……？」

そこは、森の中。

「俊……」

ミミは、目を見開いて言った。

「ここ、スイーターマンに滅亡させられた、私の星……」

強く……

森の中、辺りは暗い。

ミミは、俊に、

「この世界は闇に閉ざされたの」と言った。

「僕、目が見えるのに、こんな光景、見たくない」

「俊、はつきり見えてるの？」

俊はこっくりと、うなずいた。

「僕、5歳で、毒を被ってしまったんだ」

「そうなの……」

ミミは、俊の頭を撫ぜた。

「僕、スイーターマンを倒したい」

「俊……」

ミミは感動した。

俊はこんなにも頑張っている。

「どこに行けばスイーターマンに会えるの？」

ミミはゆっくりと、

「……このまま、森は出なければ」

「そうなんだ」

ミミと、俊は、歩いた。

この世界は悲しすぎる。

そう、二人とも思っていた。

ミミは、魔法の杖を出した。

ポウ……

魔法の杖の先が光った。

「これで、少しは……」
明るい気分に……。

そう、ミミは思っていた。

「もう、僕は大丈夫、ミミ、僕は強くなるよ」

「俊……」

ミミは俊の手を取った。

「行こう、ミミ」

俊はそう、言って、ミミの手を強く握り返した。

黒マントの男

「ここ、ちょっとおかしい」

ミミが言った。

「え？」

俊はミミの方を見た。

「この、建物、時空が歪んでいる」

その家に入る二人。

空間が歪む……、

舞踏会の会場。

しかし、そこには誰もいない……、

「出てこい！スイーターマン！」

俊が叫ぶ。

静まりかえった、会場に、不気味な声。

「ひひひ……俊……お前、目が見えたか……計画通りだ」

「計画……？何のことだ！」

俊がその声におじけづかずに、叫んだ。

「とし……お前は、勇気ができただろう?」
「……?」

「それを、打ち砕く……ひひひ」
「なっ……なにを……」

俊がそう言つと、ミミが俊を手で制した。

「貴方たちの企みは、なに?」
「ひひひ、私たちの望みは……」

黒いマントの男が出てきた。

「世界を暗黒に……希望もなく……絶望する、ひっひっひ」

「俊……」

ミミは俊にしがみついた。

「ミミ?」

「怖い……俊は?怖くないの?」

「うん、僕は大丈夫だ、ミミ」

俊は、そう言つと、キッ、と黒マントの男を見た。

「僕が、おまえを倒して、終わりにしてやる!」

決闘

「逃げよう！俊」

そう言うミミに、俊は、

「ここで決着をつける」

「俊……？」

ミミに俊は優しく微笑んだ。

「ミミ、魔法の杖を貸して」

「俊！貴方まさか、戦うの？」

俊は大きく頷いた。

ミミは俊の前に立って、通せんぼをした。

「ミミが、教えてくれた。優しさと強さを」

「俊！あの黒マントの男は……貴方の思ってるより」

「君のしていたように……僕も戦う」

「だめ！俊！」

ミミは俊を抱きしめた。

「ミミ……君を……守りたいんだ」

ミミの瞳から涙が……、

「俊……」

「杖を、ミミ」

俊に杖を渡すミミ。

「必ず返すよ」

「俊……」

俊は、キツと黒マントの男を見た。

「お前、名前は？」

「私は、タイバー」

「タイバー！勝負だ！」

俊は魔法の杖をピタッと、タイバーに向けた。

「ひひひ、返り討ちにしてやる」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5233z/>

仮面舞踏会の瞳

2012年1月4日01時47分発行